地場型住宅建設と居住地管理に関する研究

—対馬上県町の集落形態・平柱造り住居—

A STUDY ON THE REGIONAL HOUSING AND THE CONTROL
OF HUMAN SETTLEMENTSurvey on village form and HIRABASIRA-DUKURI house
in Kamiagata of Tushima Isle

申 五均*, 東樋口 護**, 橋本清勇***

Ogyun SHIN, Mamoru TOHIGUCHI and Seiyu HASHIMOTO

In Tushima Island, houses have traditionally been built by the villagers' cooperative works, using timber grown in their communal forest. Recently because of the depopulation and the change of the occupation, this kind of traditional cooperative management of village lives, that can be evaluated as the harmonious ways to the environmental and historical context of this district, have become diminished. This is a study to clear the system of building "Hrabasira-dukuri" houses, and to consider how to be the local housing and town-planning. As a result, we cleared that the existences of private forest, the knowledge on housing of clients, "Kasei" of village community, traditional artist, enable the system of the self management of housing, and that the depopulation, the variation of employment, and the incoming of other timbers market happens the housing system from directly management to contact construction.

Keyword : traditional private house, wooden house, housing construction, cooperation construction system

伝統的民家、木造住宅、住宅建設、共同建設システム

1. 本研究の背景と目的

近年、社会・経済の変化に伴い住宅生産の工業化・近代化が進み、そのあおりを受け地域において培われてきた土着の住居様式および家造りの仕組みは、地域社会及び周辺環境への優れた適合性を内包しながらもその変貌を余儀なくされている。この中で対馬には、自家が所有する持ち山から用材を伐り出し建築主が中心となって家造りの一切を取り仕切り(直営方式)、またカセイ(住民の合力機構)の援助を得ながら、「平柱造り」と称される独特の伝統的住居を造り出す仕組みが一部に残っている。

本研究は、対馬、その中でも平柱造り住居の多い上県町の直営方式による住宅建設の実態を、それを生み出す背景と共に捉え、また普請形態が直営から請負へと移行する要因について論考する。つまり、地域の風土や地場生産力を活かしながら、自然環境や地域文化に調和した住居と集落を創り出すシステムとして再構築するための基礎的な示唆を得ることを目的としている。

本論では、伝統的な集落形態と平柱づくり住居が現存

する地域として、長崎県上県郡上県町を調査対象として選定し、集落構造の特性及び平柱造り住居を生み出している直営による家造り形態について、平成5年10、11月に現地観察及び聞き取り調査を行った。上県町は、対馬の北に位置している。町の殆どが山林で覆われ、沿岸沿いの僅かな平地に、町役場のある佐須奈地区をはじめ、数百人程度の集落が21点在している。この上県町で行った調査をもとに、上県町の集落及び住宅の形態を述べるとともに、そこで展開されている地域密着型の住まいづくりのしくみについて、人的・物質的結び付きを踏まえながら明らかにする。

農山村における伝統的な労働・儀礼などの民族的研究は多く、生活互助組織、共同意識、風土への対応などについては、これらを参考としている^{*註1)}。建築学の分野では、現存する建築の原初形態を扱ったものに古川修、著者らの「島嶼の建築生産」^{*註2)}があり、本論はこの研究の発展である。また現代の地場型生産組織、在来の住宅生産システムに関する研究も多く、本論はそれらを踏

* 京都大学大学院工学研究科博士課程
大学院生・工修

** 京都大学工学部建築学科 助教授・工博

*** 京都大学工学部建築学科 助手・工修

Graduate School, Kyoto Univ., M. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Kyoto Univ., Dr. Eng.

Instructor., Dept. of Architecture, Kyoto Univ., M. Eng.

図1 志多留集落の位置と立地状況

まえ、集落形成との関係、地形、山林との関係などに留意しつつ、原初的住宅生産の形と意味について探求するものである。

2. 上県町志多留集落の集落構造

上県町の集落形態を把握するために、同町内にある21の集落の中から、伝統的な集落形態を残しており、かつ、集落人口が上県町集落の平均的なものとして、志多留集落を選び、そこで行った現地調査に基づいて、集落の概要、地形条件・土地利用の実態、屋敷構え・平面構造の特徴などに関して分析する。

1) 志多留集落の概要

集落調査対象地である志多留集落は、上県郡上県町の南西部の朝鮮海峡に突出した伊奈崎の基部に位置し、志多留川によって開かれた東西と南北方向の谷間に位置している(図1参照)。集落は、集落の内部を通る志多留川を境に「上の町・中の町・下の町」の三つの領域で構成され、その中に各住戸の敷地、一部の農耕地、さらに集落住民が共同で管理する共同空間が存在する。集落人口は、調査時点の平成5年11月1日時点で、総戸数50戸、住民数145人となっており、近年、若者層の本土への流出による過疎化と高齢化が進んでいる。

2) 集落生業と土地利用の実態

集落の主な産業は、林産業(主に木材、椎茸)及び漁業である。志多留集落では、ほぼ全世帯が多かれ少なかれ持ち山を所有しており、加えて、本戸^{ほんこ}*注3)の41戸が共同で所有権を持つ共有林もある。この共有林の制度は、対馬の伝統的な集落で共通で見られる制度である。

沿岸部及び志多留川沿いの平地では、僅かながら農業も営まれており、特に集落の北側には谷筋に沿って、水田が広がっている。集落の中を走る広域林道の両側、下の町の奥にも農耕地があり、また殆どの敷地内外部に小

写真1 伝統的住居(その1)外観

図2 伝統的住居(その1)間取り

写真2 伝統的住居(その2)外観

図3 伝統的住居(その2)間取り

写真3 現代の住居 外観

図4 現代の住居 間取り

さな野菜畑がある。

3) 屋敷構えおよび平面構成の特徴

集落における伝統的な屋敷構成は、元々その地域で暮らしていた本戸や分家と、地域外から転入してきた寄留者とで、異なっている。本戸や分家が所有する住居では、年代差または身分の違いによる階級差により、門構え、建物規模に違いはあるものの、石垣等で囲った敷地と、その中の、住居としての「主家」、脱穀などの作業場や農機具等の収納場等に使われる「雑家」、より構成される。さらに、敷地外に主に蔵として使われる、2×3間程度で高床式、板壁の「小屋」もある。一方、寄留者の住居は、決まった形式がなく、敷地も本戸と比べて小さい。近年建てられたものは、プレハブ住宅である。

本戸の主家の平面構成は、「床の間」「座敷」「次の間」「三畳敷」「ダイドコロ」「納戸」の6室と「土間(ドウジ)」から構成されている(図2、3参照)。またダイドコロの下手には、「炊事場」及び「居間」が下屋として取り付けられることが多い(図4参照)。重要な特徴は、作業場として雑家があるため「土間」が狭いこと、「ダイドコロ」と呼ばれる広間を持つこと、さらにそのダイドコロの周りの柱には、「平柱造り」の名称の所以でもある、偏平な平柱^{*注4)}が用いられていることである。

3. 集落における共同空間

集落の中には、集落住民が共同で管理運営する空間＝「共同空間」がある。志多留集落の場合(図5)、「中

図5 志多留集落の共有地の「ペーエ」と小屋の所有・管理状況

の町」の中央にある空間、海岸部にある空間の一部、河口から志多留川を少し上った「上の町」の中央にある空間がそれに当たる。これら共同空間は、集落に受け継がれてきた重要な空間であり、その維持管理は集落住民が共同で行う。特に「中の町」の中央にある共同空間は「ペーエ」と呼ばれ、干し場の意味を持っている、面積約2310㎡（約700坪）の共同の農作業場である。集落の3つの町の中で「中の町」居住者21戸だけが共同で所有しており、作業用の広場を中心に小屋^{*註5)}が建ち並んでいる。この「ペーエ」の運営が始まったのは藩制時代に遡ると言われ、初期は共同所有・共同管理であったようであるが、現在は、共同空間としての基本的な性格は変化していないものの、「ペーエ」周辺の小屋と小屋の全面部の空間は、その小屋の所有者に暗黙的な利用権が認められ、それまでの共同で管理する方法から分割して利用管理する方法に変わっている。

社会的な変化に伴って、管理方法等が若干変化しつつあるものの、これらの共同空間の存在は、集落住民同士の連帯心を保持し強化する役割を現在でも担っており、また志多留集落にみれる各敷地－共同空間－集落－山林というこの地域独特の居住地形態を形成し保全するキーとなっていると言える。

4. 集落における共同作業

集落では、集落住民による共同作業「カセイ（加勢）」（或いは「ユイ」）が現在でも行われている^{*註6)}。カセイは、古くから一世帯だけでは困難な作業、例えば、農作業、建築作業、森林管理、集落の環境管理、などにおいて集落住民が互いに無償で労働力を提供しあう事である。先述の共同空間と同様に、集落共同体及び集落形態を維持・発展させた主要な要素であると考えられる。主な共同作業内容及びその現状は、次のとおりである

1) 建築作業 昭和40年頃までは、いかなる建築・建設作業も親戚および集落住民によるカセイが当然の行為として行われてきた。しかし、集落の過疎化、出稼ぎ人の増加、請負による建築作業の増加などの社会的な変化要因によって、現在では一般的に本屋(主家)などの重要な建物の新築作業のみがカセイで行われることが多い。この新築作業では、木の伐採・搬出段階から建前や瓦葺き作業に至るまでの様々な工程でカセイの手が加わる。これにより人夫を雇わなければならぬ作業も自分達の手で済ませることができ、経済的にも大きな助けになっている。また一方でカセイにきた人たちは、カセイの経験を通して「家造り」の知識を得る。建築作業におけるカセイは、特殊なマネジメントが必要となる家造りについて、建築主以外の人々が体験し知ることができる有効な手段であり、その点で、直営方式による平柱造り住居を次世代へ継承する重要な役割を担っていると言える。

2) 農作業 主に水田での田植えの時にカセイによる共同作業が行われてきた。水田の面積によりカセイに来る人数も決められた。建築作業の時とは異り、親戚が主軸となり、必要によって近所の人にも頼む。しかし、現在は1)で述べたような社会的な変動要因および農作業の機械化によってごく一部でのみ続いているだけで、殆ど行われなくなった。

3) 集落の環境管理 毎年のお盆前の8月10日頃集落の全戸が参加し、河川・共有地・道路などの環境整備が行われる。毎年各町の分担区域を決め、路面の掃除、雑草・汚物の除去等が行われており、分担区域は毎年かわる。各世帯で1人以上の参加が義務付けられている。

5. 平柱造り住居の概要

対馬において現存する伝統的な住居である平柱造り住居は、そのほとんどが建築主の直営方式によって造られた住居であり、現在でもその大半が直営方式によって造られている。平柱造り住居は、間取りに建築年代差または階級差により数種類の形式が存在するものの、どの建物にも依然として間取りや構法には伝統が色濃く残っている。ここでは、特に最近造られた建物とそれ以前の建物との違いに注目しながら、現地調査の中で多く見られた形式について述べる。

1) 間取り 聞き取り調査を行った大工の一人が「対馬の家は外観や間取りは殆ど同じ」と言うように、部屋の基本的な構成はほぼどの建物も同じである。主家の中心となるのは「ダイドコロ」と呼ばれる当初は板敷きの広間であり、普通12畳半ぐらいの広さを持つ（上は18～23畳までである）。ダイドコロのまわりに並ぶ「平柱」の厚さは4寸5分（約13.5cm）前後で他の柱と変わりがないが、見付幅は1尺（約30cm）当たりが一般的である偏平な形状をしている。平柱の寸法、特に見付幅は、特に

決まっていないが、このような大断面しかも偏平な柱を使用するのは、対馬を除き全国的にも例を見ない。平柱は通常、ダイドコロの側面には1間間隔、背面（入り口から見るとダイドコロの正面）には3間を4等分するように並べられ、背面の柱間の一つを仏壇置き場とし残りを戸棚や開口部としている（写真4）。伝統的な平柱造り住居では、ダイドコロのほか、「三畳敷」「次の間」「座敷」「床の間」などは必ず設けるなど、接待・格式の公空間が大半を占めているが、現在造られる平柱造り住居では、三畳敷はほとんど造られず、変わりに居間や炊事場、ダイニングルームなどが広く造られている。ま

写真4 ダイドコロ

ダイドコロ正面には物入れと仏壇置き場が設けられる。天井は防寒対策として後で張られた物である。[上県町志多留]

たダイドコロも10畳前後とかつての規模を縮小したが、日常生活の中心となる居間および炊事場は逆に拡張されてきた。間の配置型にも「次の間・座敷・床の間」には変化が見られないものの、ダイドコロ及びその他の間については、様々なパターンが見られる。またかつては屋外に設置されていた風呂や便所は、利用の便利さを考え設備を現代化し屋内に取り込まれている。

2) 構造形式 平柱造り住居の軸組は、平柱によって構成されるダイドコロを中心に展開する。四面にわたり平柱の柱頭を背が1尺程度ある桁でつなぎ、各柱間の内法高にも同様に一尺ほどの背の差鴨居を入れて柱を緊結し、桁と差鴨居の間に貫を通して固めている(図6参考)。このようにダイドコロ部分では広い空間が創り出されているため、各構成部材は太く堅牢な造りとなっている。近年のものでは、ダイドコロ部分に理想的な架構法を用いる代わりに天井板を配したり平柱を、ダイドコロの他に居間にも用いるなど違いが見られる(図7参考)。また平柱の寸法も、伝統的な住宅で主に使われてきた1尺×5寸より規模が縮小した8寸×4寸2分の見付け幅を見せている。棟高は22尺(6.6m)、軒高は15尺(4.5m)程度である。

また小屋組は、梁行梁上の棟通り及び棟と側との間を2分割或いは3分割した位置に小屋束を建て、梁行方向を貫で繋いで棟木及び母屋を受け、これらに垂木を配し

図6 伝統的な住居におけるダイドコロ部の構造

図7 現代の平柱造りの構造

外部より見たオオドコ建ての構法。床下に通風を図った空間が見られる。

内部より見た大床建ての構法。コンクリートの布基礎に連結された土台に柱が立ち、少し上がった所で大引きが入り、これに根太がかかる。人が屈みながら移動できるほどの空間である。

写真5 オオドコ建ての床組構法

た野地板を渡して瓦を葺く和小屋の構造となっている。

床組には「オオドコ建て(大床建て)」*註7)と呼ばれる床高の高い対馬固有の構法(写真5)を用いる。

3) 寸法の特徴 座敷部分とダイドコロでは寸法の取り方が多少異なる。座敷部分では、柱間2間の場合、内法寸法が12.6尺(382cm)ないし12.65尺(383.5cm)、1間半の場合、9.45尺(287cm)ないし9.5尺(288.5cm)で、全て6.3

図8 対馬民家の柱間寸法

尺×3.15尺(191cm×95.5cm)の京間による畳割制が取られている。この場合、柱が4寸角であれば柱真心が13尺(194cm)となり1間6.5尺で決めることができるが、柱は4.1〜4.6寸が用いられているので予めその差を見越して設計せねばならない。これに対し、ダイドコロ部分は内法制とも真心制とも言えない複雑な寸法が用いられている。ダイドコロの梁行寸法は座敷が内法制を取るの納戸の柱間取り方によって異なることになるが、納戸の梁行は、6.3尺の畳割り寸法で抑える方式、この寸法を柱心に決める方式、柱心を6.5尺とする方式の3通りが見られ、大方は畳割寸法による方式が取られている(図8参考)。

6. 直営普請の実態とその変化要因

ここでは上県町において近年なされた住宅新築工事の中から、聞き取り調査を行うことができた直営方式の家造りの5事例をもとに、今日現地で行われている直営方式による家造りの実態に関して明らかにする。特に、現地での聞き取り調査では直営方式の他に、対馬全島で主流となりつつある請負方式の事例に関しても調査を行い、その比較を通じて、「建築主」「木材の準備」「カセイ」「職方の手配」「普請スケジュール」という点で、直営方式の特徴について整理し、当地域で直営方式と請負方式のどちらで家造りが行われるのか、その条件について考察する。

1) 建築主 今回聞き取り調査を行った事例では、建築主のほとんどが持ち山を所有しており、植林や育林などの山林業務を通じて日頃から山との深い関わりを持っている。それらの体験から「木を見る目」が養われており、かつ「木の選び方」に関する知識が得られている。特に普段から持ち山の状況、即ち「山のどの場所にどの樹種の樹齢何年の木がどれほどかつどのような生育常態にあるか」ということを詳しく把握している点で共通している。建築主の職業は様々であるが、本業として林業に携わる場合は建築主が独力で直営方式による家造りを行うが、サラリーマンの傍ら林業に携わる場合は父親或いは親戚からの助言や協力を得ることが多い、等違いが見られる。これは職業によって建築主が持つ木に関する知識量の違いが生ずるためと考えられる。

2) 木材の準備 家造りにおける木材準備に関わる一連の作業は、建築主が中心となる直営方式での家造りにおいては多くの時間と労力を要するとともに建築主の高い木材知識・建築知識が求められる過程でもある。木材の準備のための手順を見ると次のようである。

①**木拾い**：建てようとする住居に応じ必要となる木材量を大工が見積もる。各部材ごとの断面寸法、長さ、材種などが決められる。

②**選木(山取り)**：山に入り、部材としての使用場所を考えながら伐採する木を定めていく作業であり地元では「山取り」と呼ぶ。材料の善し悪しは見た目のみならず

家の耐久性にも関わることであり、また建築主の「家は100年、200年はもたせたい」との心意気が加わって選木は慎重に行われる。

③伐採：伐採の時期は主に秋であり、いちばん多く伐採する時期は11月～1月の間である。建築主の確保した山に入り立木を伐り倒す。伐採師と呼ばれる専門伐採職人を1人雇い、1日当り5人程度の作業で1週間～10日かけて行う場合が一般的である。伐採跡地には子孫のためにと桧・杉を中心に植林される。

④造材（玉切り）：大工により、あるいは大工の指示を受け、丸太を用途に応じた長さに切断する。知識・経験のある建築主では自ら造材を済ませる場合もある。

⑤木出し：建築主と数名のカセイによりパワーショベルをリースして造材が済んだ木材を道路際まで引き出す。昔は馬で作業を行った為、深い山での木材搬出も可能であったが、現在は機械で道路まで木材を引き出すため、深い山からの木出しは回避している。普通2～3日間、長くは10日間くらいになる。

⑥製材：製材所に運び込まれた丸太の状態の木を使用用途に合わせ製品化する。製材が終えた木材は建築主が持ち帰り敷地内に保管する。

3) カセイ（加勢） 竣工までには大工や職人といった本来の施工者に加え、様々な工程に建築主やカセイの手が加えられている。カセイは伐採や搬出のほか、建前や瓦を葺く作業など様々な工程に参加し、建築主の現金支出を抑えている。なお建前には声をかけなくとも人伝に聞き近所の人が集まり、男性は建築作業を手伝い、女性は食事の世話をする。

4) 職方の手配 施工工事に必要となる職方は、段取りを考えて全て建築主が手配し賃金の支払いまで行う。

（表1参照）

表1 職方への発注・支払方法の例

区 分	発注者	支払者	支払い方法
1. 伐採師	建築主	建築主	日給制/作業終了後
2. 機械リース	建築主	建築主	日割計算/作業終了後
3. 製材所	建築主	建築主	材積による/作業終了後
4. 仮 設	建築主	建築主	日給+材料費/作業終了後
5. 基 礎	建築主	建築主	日給+材料費/作業終了後
6. 大 工	建築主	建築主	日給制/毎月月末
7. 屋 根	建築主	建築主	日給制/作業終了後
8. 板 金	建築主	建築主	日給+材料費/作業終了後
9. 左 官	建築主	建築主	日給+材料費/作業終了後
10. 建 具	建築主	建築主	制作枚数による/搬入後
11. 畳	建築主	建築主	購入枚数数による/搬入後

* 7. 瓦は建築主支給
10. 材料費は建築主支給

5) 普請スケジュール 伐採が秋から初冬にかけて行われており、建築主はそれまでに大工を手配し、そして伐採前1ヶ月以内には木の選定（山取り）を済ませる。一般的な普請スケジュールは表2に示す通りに行われる。近年は山林を所有しながらも請負方式をとる建築主が

増えている。これには例えば自材を使用する場合、搬出に不便な山では搬出に手間と費用がかかる、木の選び方や家造りの手はずが分からない、また長期間にわたり家造りに関わる時間の余裕がないなどが主な理由である。上述した内容にみられるように、直営方式によって家造りを行う場合、建築主に直営を行わせるのは、よい材を利用して家を造りたいという意識が最も強く影響していると考えられる。しかし、そのような意識があればすべての建築主が直営方式をとれるというわけではなく、持ち山の有無、木に関する知識、家造りに関する知識、などが必要であろう。表3はこれらの観点から対馬における建築主の分類を図ったものであり、図9は各タイプの家造りの流れをモデル化した図である。山林を所有する場合はA、Cタイプの建築主のように直営方式による家造りを行うことも多いが、Cタイプの建築主には本人の不足する知識を補う世話人を要する。B、Dタイプの建築主は知識の有無に関わらず請負に拠っているが、この場合の要因となるのは時間と費用の問題である。一方、山林を有しない場合はF、Gタイプのように請負が主となるが、中にはEタイプのように木材を他の所有者から購入することもある。直営方式による住居がきまって平柱を用いた構法であるのに対し、請負方式の場合ではそのような構法は採られていない。

表2 普請スケジュールの例

		従事者	S62		S63										日		程										H1										備考																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
			6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		4	5	6																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
水	木拾い	大工																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									

* 施工費は5千万円 ** 木材購入に施工費の3/1 大工手配に施工費の3/1

表3 建築主の分類

持ち山	木材知識	普請方式	要 因	タイプ
建 築 主	あり	直営	良材を使いたい 何代も持つ家が欲しい 費用節減	(A)
		請負	時間にゆとりがない 煩わしい 費用節減	(B)
	なし	直営*	良材を使いたい 何代も持つ家が欲しい 費用節減	(C)
		請負	時間にゆとりがない 煩わしい 費用節減 分からない	(D)
	なし	直営**	良材を使いたい 何代も持つ家が欲しい	(E)
		請負	時間にゆとりがない 煩わしい 費用節減	(F)
		請負		(G)

* 大工や建築知識のある親戚などから協力を得る
** 木材は製材所或いは個人の持ち山から購入

図9 普請のフローチャート

7. まとめ

これまで上県町における集落及び住居形態、それを生み出す直営方式による家造りをみてきた。これまでの内容を整理し、上県町において直営方式による住宅建設と平柱造り住居を生み出し、それを継承させる要因とは何であるのか、についてまとめると次のようになる。

①**所有林の存在**：対馬における土地利用状況を見ると、全島の約89%が森林であり、中でも私有林の割合は全国平均に比べ78%と非常に高く、上県町では全山林面積の84%と対馬中でも最も高く、山林所有世帯も多い。これは木材を直接調達する上で非常に有利であることに加えて、植林→育林→伐採→植林という家造りのための育林サイクルが確立され、家造りのための良質な木材が安定して供給されることを保証している。

②**建築主の豊富な建築知識**：建築主の「木を見る目」や「木に関する知識」は、直営家造りを行う上での必須不可欠な条件であるばかりでなく、建築主に対して他人任せでなく木をうまく生かして家造りを行おうという意気込みを与えるという能動的機能も果たしており、その意味で直営方式による家造りを内面的に支えている要因でもある。持ち山の管理や山林業務、またカセイへの参加を通して、木に対する愛着や木材を中心に家造り全般に対する関心を高めていると言える。

③**集落共同体としてのカセイの存在**：カセイは、建築主の経済的な負担を軽くするだけでなく、家造りや木に関する知識を親戚や知人、地区内の人々と共有でき、直営

家造りを次の世帯に継承させる役割を果たしている。

④**伝統構法としての平柱造りの象徴性**：長期耐用構法である平柱造り住居は、平柱によって構成されたダイドコロという家の象徴的な空間の存在を有しており、家造りを他人に任せず、建築主の直営による納得のいく家造りを先導する要因となっている。

⑤**伝統技能を備えた職人の身近な存在**：薄れゆく伝統構法を受け継ぐ職人が健在であり、対馬独自の構法である平柱造りや大床建てを施工できる大工・職人が、身近に存在するため、建築主が仕事を依頼しやすい。

さらに、これら5つの要因が空間的かつ時間的にうまくリンクしており、集落内でモノ（木、家）とそれらに関する知識の共時性かつ通時性を保つことができる。

逆に、過疎化・高齢化の進行、農林水産業の衰退、第3次産業の発展、といった社会状況の変化や、それに伴う集落社会の崩壊、生活スタイルの多様化は、これらのリンケージが成立する条件を直接的もしくは間接的に消滅させる要因と言える。

本論文では、対馬上県町の集落および平柱造り住居が形成される実態について述べ、一つの伝統的集落形態が、その地域の風土や社会、産業と深く結びついた結果生み出されたものであることを示すことを試みた。

住宅建設の工業化が進みつつある中で、住民主導による住まい・まちづくりは重要な課題である。近年各地域において、景観・町並みの保存、住環境改善等をモチベーションとし、建築協定やデザインガイドライン等の手法によって、住民主導の住まい・まちづくりを行う試みがなされている。本論文で取り上げた、住まい手がいわゆる「共の観念」をもち「共同空間」を管理し「共同作業」を行うしくみは、町を良くするという意識をもった住まいづくりを行う上で、都市の団地集会所や町内会などの共同空間を管理すること、町内に防災拠点をおくこと、地域ケアのシステムをつくること等、まちづくりとして展開されてきたものを地域の「共同」行為・空間として住まい手の中に位置づけ直すことの必要性和有効性を示唆するものであると考えることができる。

謝 辞

本研究の一部は、平成5年度「日本生命財団」の研究助成金および平成5年～6年「富士ゼロックス小林節太郎記念基金」の研究助成金によって行った。ここに記して謝意を表します。また本研究の一部は当時の大学院生であった山上勝氏と共同で行った。

注：

- *1) 参考文献7)、8)を参照
- *2) 参考文献6)を参照
- *3) 対馬の伝統的な集落においては本戸、分家、寄留の3つの社会グループがあり、一般的に本戸は耕地、山林、海面の独占的な所有が認められてきた。対馬の山林はこの本戸群が私有林の殆どを所有しており対馬の林業に大きく影響している。
- *4) 木材の断面の大きさは1～1.5尺×4.5～5寸に及び、それに対応する梁も1尺×1.5尺の断面積を持っている。柱の厚さは他の柱と変わらないが、見つけ幅は一尺あたりが標準と思われる、偏平な形状のものである。平柱の寸法には規格的なものは認められない。この平柱造りは対馬全島で存在する建築方式であり、全国的にも例の見ない特異な形式を見せている。
- *5) 本土ではふだん小規模で粗末な建物を言う場合が多く、民家においては小規模の付属小屋を指しているが、対馬における小屋は他地方の蔵の用途をもつ建物であり、本屋造りと同じく平柱造りであり、100年以上200年も耐える耐久寿命を持つ。規模は2×3間ほどの広さを持ち、床と壁は板で造る。オオドコ建て構造となっている。
- *6) 民俗学では「ユイ」とは「何ら代償を求めず、奉仕的に順次に、対等の相助組織の中で働きあうこと」もしくは「平等相互共同作業」（石上堅著「日本民俗語大事典」より）とされ、また建築学では「相互扶助を目的として労働力を交換する社会慣行」（日本建築学会編「建築学用語辞典」より）となっている。「カセイ」については、民俗学でも建築学でも特に定義は見られず、原義的には指摘されるように「無償の労働力提供」ということになる。しかし、上県町では平柱造り住居が新築される過程で集められる近隣もしくは系譜の人々のことを「カセイ」と呼び、さらに新築するごとにカセイが集められる。従って、ここでいう「カセイ」とは、現地で慣用されている呼称であり、「異なる作業」間で労働力の等価交換が行われているという形跡はないが、家づくりという事象では相互扶助的な労働力交換が行われており、つまりは「カセイ」という言葉がほぼ「ユイ」と同義的な言葉として用いられていると考えている。
- *7) ほかに大床建ち、大床組、大床構法などと称する。基礎面から床面までの間を高くし、空気の通しをよくした方式であり、対馬の木造建築でみられる主な特徴である。基礎面の上に四角の礎石が置いてその上に柱が立つ。これにより床高は大幅に上がることになり、基礎に面した部分から床面までの構造材及び畳の湿気や白蟻による痛みを最大限防ぎ、建物の

耐久寿命を長くすることができる。現代の大床建てはコンクリート基礎の上に土台を緊結しこれに柱が立つが、土台上部にはさらに水平材が柱間に入っており、この高さに大引きが渡され根太が掛かる。柱間隔の開くところでは束を立てて支持されている。これにより床高は大幅に上がることができる。

参考文献：

- 1) 長崎県教育委員会「長崎県の民家（前編）長崎県民家緊急調査報告書」、1972
- 2) 日本建築経済委員会「地域の住宅生産システム」、1986
- 3) 日本建築経済委員会「地域の住宅生産システム—その後—」、1992
- 4) 九学会連合会对馬共同調査委員会編「九学会特別報告書」、1954
- 5) 松永達他「対馬民家のダイドコにおける空間構成と祭儀」、日本建築学会計画系論文集、1994. 4
- 6) 東樋口護他「島嶼の建築生産」、日本建築学会大会学術講演梗概集、1981. 9. 1963～1964p.、1982. 10. 2143～2148p.、1983. 9. 2463～2474p.
- 7) 竹田旦編「民俗学の進展と課題」、国書刊行会、1990
- 8) 日本民俗研究大系編集委員会編「日本民俗研究大系第五巻造形伝承」、國學院大學、1984

(1995年8月14日原稿受理、1996年7月24日採用決定)